

05・出たくない電話

04から数日後。一月十八日（土）十九時ごろ。
すずらん市汐見台。

場所は青柳家。

主人公、夕食を終え、おじいちゃんおばあちゃんとリビングにいる。
一度お手洗いで席を外して戻ってくると、テーブルの上に置いたスマホの画面が、光っている。

……うん？ 誰だ？

あ、あ！ もしかして……！

主人公、スマホをのぞき込み、一瞬、唯為理からではないか!? と期待する。

あの日以降、主人公と唯為理はすっかり仲良くなった。

この週末は唯為理が原稿の締め切りで忙しいとの事で、会うのはかなわなかった。

だが、もしかすると早めに仕上げる事ができて、その連絡かもしれない！

主人公は思う。

……唯為理は正直、すごく可愛い。と。

唯為理は、声で話すのは苦手なタイプだ。

だが、文字だと饒舌で、マメで、特に用事がなくても、色々送ってくれる。文章も、スタンプの使い方も可愛い。

特に、いいタイピングで『どこで見つけたの？』みたいなデザインスタンプを送ってこられると、主人公はつい笑いってしまう。

本人にその気はなさそうだが、唯為理にはお笑いのセンスがあるような気がする。

唯為理と話していると、主人公は学生時代、初めて携帯電話を手に入れた時の事を思い出す。

あの頃は携帯電話自体が珍しくて、また、友達と話せるのが嬉しくて、一日中誰かとやり取りをしていた気がする。

どんな些細な話題でも楽しくて、夢中になって一日中ガラケーを見つめていたように思う。

だから、そんな楽しい日々を再び体験しているようで、とても幸せなのだ……。

ま、今はそんな友達、わたしにはほばいないんですけどね……。

いるのはSNSでゆるく繋がっている、一年に一回会うかな？　くらいの友達ばかりなんですけどね。

それもちろんありがたいんだけど、絶対なくしたくないんだけど、まあ、淋しいよね。いや、直接会える友達が完全にはいないという事もないんだけど。

『あの子』たちはもう……。

ごほんごほん。嫌な事は忘れよう。

……だから、楽しい。唯為理ちゃんと話してると、学生に戻れたみたいで。

もしわたしが地元に戻っても、唯為理ちゃんは今みたいにやり取りしてくれるかなあ。忙しいかなあ……。

ところで唯為理ちゃんはガラケーを……持った事はなくても見た事は普通にある……よね……？

あ、聞いてみるか！

ドキドキドキ……。

だが、主人公がドキドキしてスマホを見ると……。

……あ。

はー。これなら出なくていいっすわ。
っーか、噂をすればっすね。

主人公、さっきまでとは別人のように意気消沈し、スマホをそつと裏返すと、ソファに寝転んでそのまま居留守を決め込む。
すると……。

※収録は通常の方法で行う

※声が少し遠い

〈おばあちゃん〉

「主人公が気づいていないのだと思っている」

あんたあ。なんか電話光ってるよお？」

おばあちゃんも気づいていたらしい。当然の質問をされる。

〈主人公〉

「あー。光ってるねえ」

〈おばあちゃん〉

「【不思議そうに】

いいのお？ 出なくてえ」

〈主人公〉

「いいのです。唯為理ちゃんじゃなかったし」

〈おばあちゃん〉

「ははは。唯為理ちゃんじゃなくて残念だったねえ」

〈主人公〉

「だからわたくし、出ないのです。わたくしはここにおりますが、おらんのです」

〈おばあちゃん〉

「ふーん……？　まあ、あんたがいいならいいけどねぇ」

おばあちゃん、不思議そうな顔をしながらも、主人公の意向に従う。

主人公、そのまま電話が切れるのを待ち——……しばらくして、ようやくそれが叶った。

はあ。でもこの調子だと、またかかってきそうだな……。

こういう時だけ連絡してくるの、やめてほしいんだけどなあ……。

主人公、暗く、イヤな気分になりつつ、着信履歴をそつと消す。

その後唯為理から連絡が来て、ベッドの上でニヤニヤできるようになるのは、数時間後の話だ。

このままフェードアウトして終了。